

「本木さんは、私以上に

立派な海軍士官に」

平間洋一

ひらま・よういち
元海軍補、花形研大大学教授



NHKで三年にわたって放映されたスペシャルドラマ「坂の上の雲」が昨年十二月で終了した。その制作にあたって海軍関連の監修・指導者として、撮影に約三年、編集上の検証等も含めると足掛け五年近く関わり、番組のエンドロールに「海軍軍事考証」として紹介された平間洋一さんに、監修の実際や苦労など、舞台裏の一端を聞いた。

「軍事知識ゼロ」からのスタート

——まず、監修・指導者としてどんなご苦労があったのか、という辺りからお聞かせ下さい。

平間 非常に苦労したのは、第一

に制作スタッフも俳優さんも軍事知識がゼロで、海軍と陸軍との文化の違いも全然知らなかったことです。

例えば、登場人物の呼び名。最初シナリオを見て驚いたのは、「東郷閣下入ります」とか「秋山少尉殿」と書いてある。そんなことは海軍では絶対と言わない。海軍では、○○閣下ではなく「司令官」「参謀長」と単に職名で呼ぶし、○○殿ではなく「分隊長」「作戦参謀」と呼び捨てにします。船はワンファミリーだから、それで通用する。それが海軍の伝統であり文化なのです。

ほかにも、出動用意とか出撃用意ではなく「出港用意」と言うんだとか、番兵ではなく「当番」と言うん

だとか、そういうふうなことをいちいち指摘して結局、シナリオは三回書き直してもらいました。

——それにしても、今度の番組は、従来の映画やテレビドラマと違って、登場する軍人さんが、わりと軍人さんらしく見えました……。平間 それはもう、入隊訓練からやりましたからね（笑）。

しかし、最初は大変だったんですよ。制作サイドに海軍二十人、陸軍三十人のエキストラを集めてもらったのですが、髪はポウポウだし、姿勢もだらしがない。その人たちを相手に、「前へ進め」「気をつけ」「休め」「敬礼」と号令をかけ、「違う、こうだ」と実地に指導する。敬礼もお辞

儀の仕方でも陸軍と海軍では違うので全部一から教えました。それでもとうにもならない人もいたから、結局、選抜した何人かを徹底的に指導して出演にこぎつけました。ちゃんとした軍人さんに見えたのなら、それは幸いです。

「入魂」された海軍精神

——秋山真之役の本木雅弘さんはじめ、俳優さんはどうでしたか。

平間 本木さんにしても、東郷平八郎役の渡哲也さんにしても、さすがに一流の俳優は違うなと思いましたが。特に本木さんは、私以上に立派な海軍士官になったと思います。

もちろん、最初は何も知らないわけですから、本木さんと広瀬武夫役の藤本隆宏さんには、「秋山真之・広瀬武夫に与えるの書」というオリジナルの教本を作って、海軍士官としての教育を一から施しました。

この教本には、「初級士官心得」や海軍兵学校の「五省」など海軍士官としての基本的駄やモットー、秋山が書いた「天劍漫録」も入れました。「天劍漫録」の最後には「軍人は満腔の愛情を君国に捧げ、上下過不及なきを要す」と書かれています。



つまり、軍人というのは愛国心だけなのだ。これが秋山真之の真髓です。よということ伝えました。

それから、海軍にはそういう堅さだけでなく、ユーモアに富んだ、スマートでフレキシブルな伝統、文化があることを伝えるために、様々な面白いエピソードも紹介しました。

例えば、海上自衛隊には今なお帝國海軍の伝統、文化が生きています。以前、海上自衛隊の練習艦「かしま」が米国の観艦式に参加した時、英国の客船「クイーン・エリザベスII」にぶつけられたことがあるのです。ところが、その幹部が謝りに来たら、「かしま」の艦長は「女王陛下にキスされて光栄に思っております」と言った。それが英国の新聞に出て「なんとというセンスのある海軍か」と絶賛されたのです。

—— そういう海軍の伝統や文化を俳優さんはよく呑み込んだと。

平間 ええ。本木さんにしても、藤本さんにしても、第一部の少尉のころと第三部の中佐のころとは顔が違う。海軍士官としての役作りを通して秋山、広瀬の精神が「入魂」されたのは間違いないです。

それは私への質問が変わって行ったことからも言えるのです。第一部の頃は「どうしてマストに掲げた軍艦旗が落ちると具合が悪いんですか」といった初歩的な質問が多かったのが、第二部に入ると「平間先生、「連合艦隊作戦参謀を命ず」と言われたら、どんな顔をしたらいですかね」というふうに変わって行った。だから、私も真剣に受け止めざるを得ない。現役の頃を思い出して、「それはやっぱり「嬉しいな」、しかし「大変だな」、しかし「やってやるぞ」という三つの顔を出さないといかんね」と答えました。

そうすると、本木さんは五秒前後のシーンでその表情を出すため、撮影前は誰も近寄らせずに没頭するわけです。また、いざ撮影が始まったら、四回も五回も撮って、監督がOKを出しても「いや、もう一回」と。私もその場において指導を求められれば、手の挙げ方が悪いとか発声法が違うとかまで教えました。その

ような俳優のみなさんの「一瞬に懸ける姿勢」には、逆に教えられませんでしたね。

外された日露戦争の 世界的意義

—— 放映が終了し、監修者として番組をどう評価されていますか。

平間 細かいことをいえば、秋山が豆をポロポロ落したり、おならをしたり、そういうことはあり得ないわけで、細かなことを書けば一冊の本が出来てくるくらい色々あることはあるのですけれども、少なくとも第二部、第三部に関しては歴史的には忠実に描かれたのではないかと思えます。また、私の守備範囲ではなかったけれども、心配されていた「乃木愚将論」についても折にふれて物申しました。その結果、満点ではないけれども、より史実に近づいたと思います。

残念だったのは、「日露戦争の世界的意義」について、あまり言及がなかったことです。

日露戦争は、黄色人種・非キリスト教国家が初めて白色人種・キリスト教国家に勝った戦争であり、その後のアジア・アラブ・アフリカの独立や人種平等の観念を確立する烽火

となった戦争です。この戦争における日本の勝利は、世界史上画期的な意味を持つ。だから、私は「シナリオにも入れた方がいいんじゃないの?」とそれとなく促し続けて、最終シナリオにはそういうナレーションが入っていたのです。ところが、実際の放映では、その部分は丸ごとカットされましたね。これがあれば、最後はもう少しビシッと決まったと思うんですが……。

—— しかし、メッセージには伝わったのではないですか。

平間 戦争シーンが多かったのですが、WEB上のコメントなどを見ると、明治の先人に見習わなければならないという趣旨の感想が沢山出ていて、全体としては、国家の危機に対して明治の先人がどのような覚悟で臨んだのかということが伝わったと思いますし、それを受け止める人が日本にはまだいる、決して捨てたものではないと思いました。

だからこそ、今の転落する日本をただ嘆いているだけではなく、どうすればもう一度「坂の上の雲」を掴むことができるか、それを真剣に考えて頂きたいと思います。